

コストをかけずに豚を守る!

馴致豚舎を活用した疾病対策

馴致豚舎による疾病対策は重要だが、予算やスペースの問題から簡単に導入できない農場も多い。しかし、既存の施設等を利用することで簡単に馴致豚舎を設けることもできる。今回は、その事例を紹介していく。

馴致豚舎の役割と馴致の目的

導入した種豚が生涯を通じて最高の生産性を発揮するためには、PRRS（豚繁殖・呼吸障害症候群）をはじめとした重要疾病への対策が重点課題である。その対策として「種豚の馴致」は重要なカギであることから、今回は、コストをかけずに馴致豚舎を設置することができた事例を紹介する。

馴致豚舎の役割に、「外部導入種豚に対して農場由来の疾病への免疫を獲得させる」、「細菌・ウイルスを多量に放出する感染豚と健康な在来豚との水平感染を防ぐ」ことがある(図1)。PRRSをはじめとした疾病に苦しんでいる農場が将来的に清浄化をめざすためには、AI・AOが可能な馴致豚舎の設置は不可欠である。

非感染豚を農場に合った方法でウイルスに暴露して感染させ、体内に免疫を作ったうえで健康に回復した種豚を繁殖豚群に繰り入れることである(図2)。これにより、妊娠中の繁殖障害や分娩会でウイルスを放出することによるほ乳子豚の感染事故を予防することが可能になる。

ビニールハウスの活用事例

まず最初の事例として、PRRS対策のために、種豚の馴致を初めて実施することになった農場を紹介する。ここでは、近年の厳しい畜産情勢のな

かでは豚舎設備に対し投資を行うことは難しくかったため、ビニールハウスを馴致豚舎として活用した(写真1)。ビニールハウスのため耐久性に問題はありますが、母豚100頭規模程度であれば問題なく使用することができた。

なお、馴致豚舎は、「月齢毎に豚房を分けて豚房間を仕切る」「他の豚舎と30m以上の距離をとるか壁を設置する」という点には留意したい。

既存倉庫の活用事例

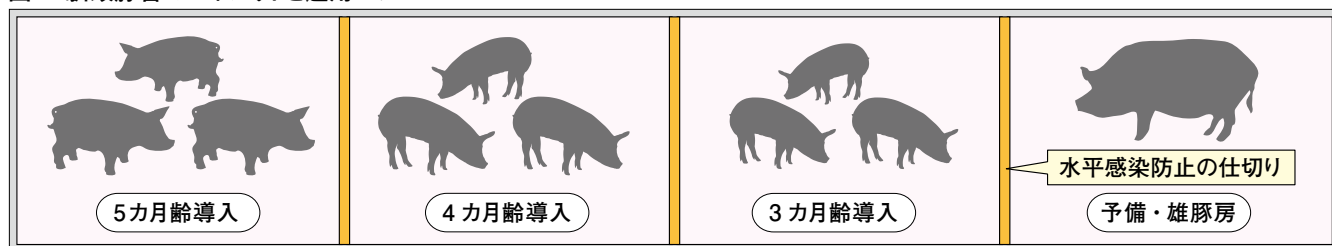
次に紹介する農場も、ハイコップSPF豚への切り替えをきっかけに種豚馴致を実施することにした。はじめに、堆肥舎の一部分を馴致スペースとした。夏場の空気の流れが悪いことから、次に肥育豚舎の端に馴致スペースを移動した。

しかしながら、肥育豚舎内で他の豚房との完全な隔離が難しく、馴致スペースへの在来豚の糞尿の流入等があり、育成豚で事故が発生した。最終的にもともと倉庫として使用していた建物を地元業者と連携して改築し、手作り馴致豚舎を低コストで完成させた(写真2)。

この馴致豚舎の使用以降、母豚群の免疫レベルが安定し、肥育豚での事故率の改善が見られるようになったと実感している。

今後、馴致豚舎の設置前後の農場成績についてデータ収集し、馴致豚舎の設置および馴致方法による効果を検証していきたい。

図1. 馴致豚舎のレイアウトと運用モデル



稼動母豚100頭、年間導入頭数36頭、3カ月に1回導入。1回あたりの導入母豚9頭(雄外部導入の場合は、+雄豚1頭)

図2. 馴致の目的



写真1. ビニールハウスを活用した馴致豚舎内部



写真2. 倉庫を使用した馴致豚舎



所在地:九州地方